

美術科教育学会通信 No.59

2006年2月28日発行

通信事務 代表：〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地

鳴門教育大学芸術系（美術）講座 橋本泰幸研究室 / Tel. & Fax. 088-687-6481 / E-mail : hasimoto@naruto-u.ac.jp

企画・編集：山本朝彦 / Tel. & Fax. 088-687-6485 / E-mail : yamaki@naruto-u.ac.jp

編集レイアウト：山田芳明 / Tel. & Fax. 088-687-6636 / E-mail : yyamada@naruto-u.ac.jp

企画協力：山田一美（東京学芸大学） WEB版：谷口幹也（鳴門教育大学）

『人間力』の基礎となる美術教育の力

美術科教育学会代表理事 橋本泰幸（鳴門教育大学）

美術科教育学会京都大会開催まで一ヶ月余となりました。会員の皆様にはご清祥のことと存じます。

報道によりますと、文部科学省は学習指導要領改訂を、早ければ18年度中にも終える様子です。この改訂は「生きる力」を育てることでは変わらないものの、新たに「人間力」向上の観点から、現行の目標や内容を見直すと伝えられております。改訂の基本には、確かな学力、社会的自立、社会変化への対応力、そして言葉や体験など、学習や生活の基礎づくりの重視があげられております。この考えに沿ってカリキュラムが編成されるわけですが、気になることは、学習指導要領の改訂を審議する中教審・教育課程部会の審議過程で芸術教科の縮小・選択教科への移行が意見として出たことです。これがそのまま実現されるかは不明ですが、芸術教科が「危うい状態」にあることは確かです。「今」を生きるための「人間力」育成のために、理数科や国語、そして英語が重視されることも意味のあることですが、ではどうして美術・音楽という芸術教科が縮小される理由になるのでしょうか。理数科で養う力、言語の力、と一緒になって、というよりそれらの力の基礎にあってそれらを「確かな力」にするのが芸術で養う感覚の力ではないのでしょうか。美術で言えば視覚による美術教育を通して養われる感じる力、考える力こそが人間力の基礎ではないのでしょうか。このような観点から請願書を作成し、文部科学省初等中等教育局長の銭谷眞美氏ほか関連の方々に郵送いたしました。また、同様な趣旨に基づき、事務局事業部主催による緊急シンポジウムを開催しましたので、それぞれ本誌の関連の頁を参照してください。

このような時だからこそ、京都大会で「人間力」として働く美術教育の力を再確認しようではありませんか。

研究の広がりと充実を目指して

—第28回美術科教育学会京都大会のご案内（最終）—

大会実行委員長 石川 誠（京都教育大学）

厳しい寒さが峠を越えるとともに、学会京都大会が近づいてまいりました。大会テーマ「変革の時代と美術教育」は、美術教育の研究・実践のあり方を問うものですが、価値観や立場により受け止め方に幅が見られます。生き残るために時代の要請に沿うという捉え、時流に惑わされずにじっくりと、いやこういう時代だからこそ、とスタンスは分かれるようです。会場提供者は、どちらかといえば中・後者の立場ですが、教育現場では、もっと複雑な判断が求められることと思われれます。私たち学会員は、美術や子ども、研究といった一定の価値・目的の共有集団ですが、一方で社会のなかの美術教育という視線に耐えることも求められるからです。

京都大会事務局のスタッフは、研究交流の場の提供という基本を念頭に、不十分な施設ではありますが、研究の広がりや充実を目指して準備を進めております。多くの会員の皆様にお力添えをいただき、お陰さまで口頭発表の登録は81件を数えました。会期中には桜の開花も予想されます。どうぞ、頭脳と心身のリフレッシュに京都大会にお出かけください。

第28回美術科教育学会京都大会 研究発表等一覧

研究発表20分、質疑応答5分、交代5分

第1日 3月25日(土)午後

表中の使用機材の略号: P-液晶プロジェクター, O-OHC, V-VHSビデオ, S-スライド

12:30	受付開始 / F棟1階玄関内
13:00 13:25	開会行事 / 会場:F16

研究発表①	A 子どもの世界観と造形	B 美術教育と方法	C カリキュラム	D 教員養成	E 鑑賞教育と美術館
室番号	F11	F12	F16	F22	F26
13:30 13:55	シャボン玉を使った幼児の造形活動-学生とのクラブ行事を通して-	教えるのか? 美術教育で-心理的効果からの検証-	オワトナ美術教育プロジェクトについて-生活と美術の間-	美術鑑賞ワークショップN*CAPプロジェクトにおける学生の学び	美術館鑑賞ガイド作製について-鶴居玲展子どものための鑑賞ガイド「絵画のきもち」を中心に-
13:55	渡辺 一洋(育英短期大学),佐塚 公代(育英短期大学) P	辰巳 豊(お茶の水女子大学附属小学校) P	大島 賢一(東京学芸大学・連合院) P	山田 芳明(鳴門教育大学),鶴田 愛子(徳島市上八万小学校) P	勅使河原 君江(神戸大学),池田真規子(神戸市立小磯記念美術館) P
14:00	幼児の平面表現の研究-見えないものを描くとき-	地域に根ざした美術教育実践の研究	東アジアにおける美術教科書とカリキュラム-日・中・台・韓を比較して-	美術教育・大学授業のなりかた-大学授業の当たり前を再考する-	学校と美術館の連携に基づく美術鑑賞シート作成の手順と教材化の工夫-徳島県立近代美術館と公立小学校・中学校の連携を中心に-
14:25	藤原 和幸(堺市教育委員会) P	芳賀 正之(静岡大学) P	新聞 伸也(滋賀大学) P	安東 恭一郎(香川大学) P	仲田耕三(徳島県立近代美術館),森芳功(同),竹内利夫(同),門倉麻耶(同),濱口由美(徳島市富田小),坂本和生(徳島市八万中),結城栄子(徳島県立総合センター),山本敏子(徳島市加茂名南小),堀内理香(高知県立佐川高),山本朝彦(鳴門教育大),有田洋子(鳴門教育大・院) P
14:30	子どもの造形表現と家族像I-昭和30年代から40年代の子どもの表現にみる家族-	美術科教育における描画指導の方法論的研究	戦後の美術科教科書における「デザイン」の研究	教科専門の危機をめぐって	テイト・ギャラリーが提供する鑑賞教育用教材の目的と方法-『テート・トレイルズ』から現行の教師用ガイドまで-
14:55	山川 真樹(京都教育大学・院) P	加沢 朝子(横浜国立大学大・院) P	天形 健(福島大学) P	大嶋 彰(滋賀大学) P	山本 朝彦(鳴門教育大学) P
15:00	現代における我が国(東京)の大人と子どもの絵本観-実態調査に基づいて-	活動の協働形成過程に関する研究-ビデオレター制作過程における活動対象・アイデンティティの組織化-	日本と韓国における「美術科学習指導要領」の比較研究-日本の昭和26年度版と韓国の第1次教育課程を中心として-	美術科教育実習の指導及び評価・評定方法について	美術館コレクションと学校の鑑賞教育-「美術を身近なものにするために」鑑賞教育研究プロジェクトの試み2-
15:25	高橋 愛(東京学芸大学・連合院) P	菅野 宣衛(上越教育大学・院) P	千 凡晋(東京学芸大学・院) P	鷲山 靖(金沢大学) P	石川誠(京都教育大学),小泉薫(お茶の水女子大附属中学校),一條彰子(東京国立近代美術館),松村一樹(京都市立高野中学校),岡山万里((財)大原美術館),山野英嗣(京都国立近代美術館) P
15:30	子どもは、土から学ぶ-恐竜島やキノコの家などの事例研究から-	美術教育におけるワークショップの可能性-「学びの方法」と「アートの方法」をめぐって-	図工・美術科カリキュラムの基礎的研究-「能力」観の考察を通して-		地域の文化財を活用した鑑賞教材開発の予備的考察-小学校教員を対象として-
15:55	愛野 良治(嬉野市立塩田小学校) P	永守 基樹(和歌山大学) P	藤江 充(愛知教育大学) P		蛭名 敦子(弘前大学) S

第2日 3月26日(日)午前

研究発表②	A 美術教育の実践	B 美術教育基礎論	C 発達・子ども論	D 鑑賞教育	E 鑑賞教育
室番号	F11	F12	F16	F22	F26
9:00	中等教育における身近な風景を瑞々しく感じる感性の教育	日本の中学校での伝統工芸の指導	図工・美術・つなぐもの-造形美術教育における総合性を「Glasgow1999計画」に見る-	つながりである美術鑑賞(1)-コンピュータを活用した鑑賞ソフトウェアの開発-	美術作品の解釈を検討させる鑑賞教育(3)-光琳「紅白梅図屏風」の鑑賞-
9:25	清水 雄大(京都教育大学・院) P	佐藤 真帆(Roehampton University) P	長島 春美(東京都立大泉桜高校) P	横田 学(京都市立芸術大学),石原麻衣(同・院) P	有田 洋子(鳴門教育大学・院) P
9:30	バーチャル舞台空間に入ってみる感性学習について-楽しみながら模型を試作し、音響および光の空間をまとめていく過程から-	豊かな「見方」を育てる絵画学習の指導-小学校高学年の多様な遠近法習得学習を通して-	子どものイメージの発達に応じた図画工作の題材の内容や支援の工夫-子どもの可能性を広げるための実践-	つながりである美術鑑賞(2)-美術鑑賞教育の提案-	小学校における自己の言葉で関わる鑑賞教育の方法
9:55	足立 彰(京都教育大学附属京都中学校) P	井無田 浩(鳴門教育大学・院) P	細内 俊久(宇都宮大学附属小学校,宇都宮大学・院) P	石原 麻衣(京都市立芸術大学・院),横田 学(京都市立芸術大学) P	塩見 孝次(京都市立桃山南小学校) P
10:00	図画工作科を通じた自尊感情の形成-表現と鑑賞を関連させた実践から-	石膏とガーゼを使った外側型取り手法についての一考察-ジョージ・シナガルの手法を子どもの造形活動で活用するために-	Second Skin-現代美術の肌膚と大野一雄の舞踏の身体-	中学生を対象とした鑑賞教育	「かたまりとギザギザ」、「塊と表面と形」:戸谷彫刻の鑑賞-《戸谷成雄「もうひとつの森へ」》(長野県信濃美術館)を鑑賞する2つの指導実践を巡る考察-
10:25	竹内 晋平(京都教育大学・院,京都市立鷹峯小学校) P	橋本 忠和(兵庫県安富町立安富北小学校) P	渡邊 晃一(福島大学) V	石井 理之(池田市立北豊島中学校) P	岡田 匡史(信州大学) P

研究部会	工作・工芸領域研究部会	美術教育の課題と授業研究部会	アートセラピー研究部会	美術教育史研究部会
室番号	F12	F16	F22	F26
10:40	工作・工芸の視点からこれからの美術教育を考える (代表:西村 俊夫)	研究部会のあり方と課題-美術教育の課題と授業研究部会のありかたをめぐって- (代表:新井 哲夫)	アートセラピーを機軸とした,美術教育の新たな展開へ-部会活動の中心的総括と今後の展望- (代表:長谷川 哲哉)	美術教育史研究の可能性とおもしろさ-変革の時代に時勢と関係ない研究を- (代表:金子 一夫)
12:10				

第2日 3月26日(日)午後

研究発表③	A 美術教育の実践	B 内容・教材論	C 美術教育史	D 鑑賞教育	E メディアと美術教育
室番号	F11	F12	F16	F22	F26
13:10 1 13:35	美術教育における電子情報ボードの活用に関する研究 森長 俊六(広島大学附属中・高校) PV	芸術系定時制高校生の美術・デザインへの関心 日野 あすか(大阪市立第二工芸高校) P	アメリカに亡命したパウハウス知識人たちの苦悩についての考察 普照 潤子(神戸大学・院)	鑑賞と表現の一体化を意図した実践事例-鑑賞活動から表現活動へ- 辻 泰秀(岐阜大学),古田 啓一(岐阜県美術館) PV	アクセシビリティに配慮したWEB教材について 近藤康太(佐賀県立北部養護学校) P
13:40 2 14:05	「対話」をひきだすための触覚教材の開発と実践的研究-「黒陶球」の実践から- 木村 典之(大分大学附属中学校) P	戦後の美術教科書における掲載作品の研究-掲載された歴史的絵画および立体作品に関する考察- 山口 喜雄(宇都宮大学) P	初等デザイン教育の黎明期における「子どものデザイン」概念の検討-日本の初等デザイン黎明期の概観と本研究の俯瞰- 大泉 義一(北海道教育大学) P	美術教育における学校・美術館・大学の連携-岐阜県美術館の取り組みを中心にして- 古田 啓一(岐阜県美術館),辻 泰秀(岐阜大学) PV	情報メディア時代の異文化理解教育ワークショップ-お茶箱プロジェクトの実践- 茂木 一司(群馬大学),佐藤 優香(国立歴史民俗博物館),原田 泰(多摩美術大学),下原 美保(鹿児島大学),上田 信行(同志社女子大学) P
14:10 3 14:35	総合的な学習としての授業実践における考察 小林 貴史(東京造形大学) P	小学校図画工作科における彫刻的表現題材の変遷 奥西 麻由子(東京学芸大学・連合院) P	昭和初期手工教育の実際②-加茂農林学校における木工による手工教育を探る- 斎藤 暁子(郡南中学校) P	知の統合力を育成する鑑賞学習支援システムの開発 橋本 泰幸(鳴門教育大学),谷口 幹也(鳴門教育大学) P	e-とびあかがわ「ワークショップ・オン・ワークショップ2005」からの考察-アートとメディアと人々が会おう場としての地域文化施設- 畑中 朋子(NPO学習環境デザイン工房,デジタルハリウッド),菊宿 俊文(NPO学習環境デザイン工房,大東文化大学) P
14:40 4 15:05	美術教育におけるポートフォリオの導入状況に関する研究-中学校及び高等学校を対象に- 吉川 昌宏(広島大学・院) P	中日中学校美術教科書の比較研究-掲載題材の内容を中心に- 胡 文涛(広島大学・院) P	北川民次と創造主義の美術教育 新井 哲夫(群馬大学) P	みろつくる-造形教育における鑑賞のあり方について- 西村 徳行(筑波大学附属小学校) P	3Dアニメーション制作の理解と指導法-3DCG表現教材化の基礎研究- 上山 浩(三重大学) P

学術講演	会場: 大講義室2
15:20 16:30	講師・演題: 佐々木 丞平 先生(京都国立博物館長)「教育の中で日本の伝統美を考える」

懇親会	会場: 大会会館
17:00 19:00	学会賞授与 / 懇親会

第3日 3月27日(月)午前

研究発表④	A アートと文化	B 芸術教育と子ども論	C 美術教育史	D 鑑賞教育	E 遊びと造形
室番号	F11	F12	F16	F22	F26
9:00 1 9:25	「改革と美術教育ルネサンス」-美術工芸の実践教育を通じた改革ルネサンス芸術(絵画・彫刻・デザイン・工芸等)をめざして- 宮之原 ノリ子 OS		戦後デザイン教育の創成期に関する考察-造形教育センターの取り組みを中心に- 太田 美香(愛知教育大学・院) P	美術鑑賞文におけるレポートリ-構造の分析 王 文純(インディペンデント・スカラー),石崎 和弘(宇都宮大学) P	間伐材素材をいかした、造形遊びの授業 押田 彰子(厚木市立戸室小学校),関 邦春(ナウシカの会) P
9:30 2 9:55	関係を築くアート-人と人をむすぶスタイル- 久永 葵(京都教育大学・院) P	授業プログラム作成のための児童の視覚イメージに関する研究-表現・鑑賞領域授業実践をとおして- 幸 秀樹(宮崎大学) P	国沢新九郎の洋画指導から見る百武兼行の絵画研究 中村 幸子(兵庫教育大学・連合院) P	中日中学校美術科における鑑賞教育方法の比較研究 -「ゲルニカ」の場合- 鮑 双陽(広島大学・院) P	社会教育における造形あそびの可能性-親子造形ワークショップによる子育て支援- 赤座 雅子(Kids' craft子ども絵画造形教室) P
10:00 3 10:25	美術教育とコミュニケーション 持田 美保(出雲市立旭丘中学校) P	現代における「子どもの絵」の発達の可能性-教育実践例にみる感性世界の表現の変貌と変革- 村田 利裕(京都教育大学) P	「教育博物館(明治10年創立)」と見失われた<教育機関としての博物館> 大司 美智子(千葉大学・院) P	国際バカロレアを視野に入れた美術鑑賞教育の実践研究-地域の美術研究を中心にして- 小池 研二(東京学芸大学附属大泉中学校) P	『造形遊び』に見る子どもの関心・意欲-教科書教材の分析を通して- 岩崎 由紀夫(大阪教育大学),武田 信吾(同大学付属天王寺小学校) P
10:30 4 10:55	表出レベル伝染(うつ)のんです!-ある小児科病棟でのビューティーな絵空事- 吉田 悦治(琉球大学) PV		学会誌掲載論文から読み取る美術教育学研究の動向 宮本 恭二郎(広島大学・院) P	絵画を読む活動を取り入れた鑑賞学習の開発 笹本 博紀(千葉大学・院,千葉市立磯部第三小学校) P	小学校との連携による「造形遊び」の意味の再考 西村 俊夫(上越教育大学) P
11:00 5 11:25		意味形成の活動単位に基づく臨床的教育実践の在り方 松本 健義(上越教育大学) P	女子美術教育における「手芸」の位置付け 山崎 明子(千葉大学) P	美術鑑賞指導の実践と考察 坂本 和生(徳島市八万中学校) P	

学会総会	会場: F16
11:35 12:30	学会総会

発表者の方へ:

- 発表の準備は、発表者控え室で行ってください。
- 研究発表の進行は、次のように行います。一鈴(15分経過)、二鈴(20分経過、発表終了)、三鈴(25分経過、質疑応答終了)
- パソコン利用の場合、募集案内で機材は各自で用意いただくようになっています。会場にPowerPoint2003を入れたWindowsノートパソコンを用意しますが、作動確認は各自で行ってください。ソフトの違い等による対応は、いたしかねます。

第28回美術科教育学会京都大会（最終案内）

第28回美術科教育学会京都大会の日程・発表者等の詳細が決まりましたのでご案内いたします。この欄は、主として大会概要や研究発表等を公式に記録する性格を持たせ、その他の情報については、本誌に同封されたチラシに載せました。どうぞご覧の上、京都大会においでください。

■会 期 2006（平成18）年3月25日（土）～27日（月）（**運営時間に変更があります。ご注意ください。**）

■会 場 京都教育大学 共通講義棟（F棟）、大学会館（懇親会）

■大会テーマ 「変革の時代と美術教育」

やや扇情的な言い回しで恐縮ですが、図画工作・美術科のありかたが微妙になってきています。従来、社会の動向は早晩、教育に波及していますから、いまさらという捉えはあるとして、当事者感覚も大事にしたいものです。戦後教育が経験主義と系統主義の間を振れてきた背景に、冷戦構造をはじめ政治・経済・社会の変動があり、また美術教育の方法で「美術で—美術を」の対立も、結局は、こうした状況に由来する子どもの生活経験の変質が原因であるという見方もできます。

こうした時期には一度原点に立ち返ってみては、という点が本大会テーマの趣旨です。この原点は、歴史を辿ることからも、あるいは、子どもの姿からも見出されるように思われます。多数の会員諸氏が研究・実践を持ち寄り、叡智を傾ける場にしていいただければ幸いです。

■主な内容

研究発表：81件の発表申し込みがあり、最終的に別紙のようになりました。研究発表①～④まで3日間にわたり設定してあります。

研究部会コロキウム：4つの研究部会にコロキウムの設定をしていただきました。研究発表、シンポと形式は多様です。ご希望のセッションにご参加ください。

- ・ **工作・工芸領域研究部会**「工作・工芸の視点からこれからの美術教育を考える」（代表：西村俊夫）
- ・ **美術教育の課題と授業研究部会**「研究部会のあり方と課題—美術教育の課題と授業研究部会のありかたをめぐって—」（代表：新井哲夫）
- ・ **アートセラピー研究部会**「アートセラピーを機軸とした、美術教育の新たな展開—一部会活動の中心的総括と今後の展望—」（代表：長谷川哲哉）
- ・ **美術教育史研究部会**「美術教育史研究の可能性とおもしろさ—変革の時代に時勢と関係ない研究を—」（代表：金子一夫）

学術講演：佐々木丞平先生（京都国立博物館長）「教育の中で日本の伝統美を考える」

佐々木丞平（じょうへい）先生は、円山応挙研究の第一人者です。昨春、京都国立博物館長に就任されてからは、鑑賞者の立場にも意を払われ、かつ美術教育にもご関心をお持ちです。

情報交換コーナーなど 会場にテーブルによる展示室を設けました。著書や活動の紹介が可能です。

会場までのアクセス

JR 京都駅から：奈良線（各停）3駅目「JR 藤森」下車、正門まで徒歩3分。（注：快速は通過です！）

京阪電鉄：「墨染」下車、正門まで徒歩7分。（これも、各停のみ停車）

近鉄京都線：「丹波橋」で京阪電車に乗換、三条・出町柳方面行き1駅目「墨染」（上記）下車、徒歩約7分。

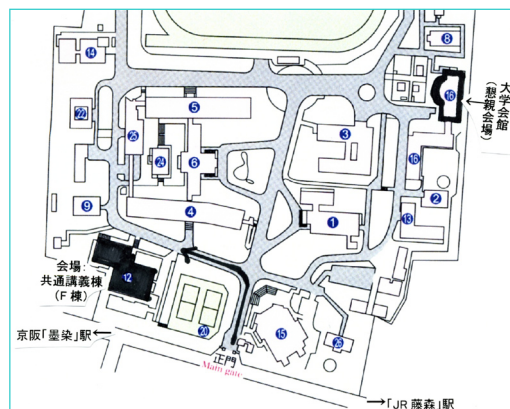
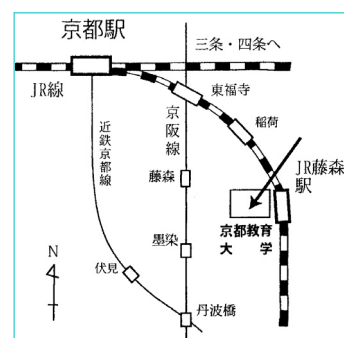
参加申し込み

■ **参加費** 学会参加費：5,000円 懇親会費：4,000円／学生（院生含む）2,500円

■ **申し込み方法** 参加申し込み及び参加費・懇親会費の払い込みは、「郵便振替払込書」に必要事項を記入の上、下記大会事務局宛にお振込みください。口座番号：00930-7-264296 口座加入者名：美術科教育学会京都大会事務局 通信欄：学会参加費／5,000円、懇親会費／4,000円（学割／2,500円）、氏名（所属）

■ **申し込み期限：**3月15日（水）当日受付も行いますが、大会運営上、できるだけ事前にお申し込みください。また、3月15日以降は口座に振り込まず、当日、受付にてお支払いください。

* **問い合わせ先：**〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1 京都教育大学 美術科教育研究室内 第28回美術科教育学会京都大会事務局 TEL：075-644-8313（村田）、075-644-8312（石川） E-mail：tomurata@kyokyo-u.ac.jp（村田）、mishik@kyokyo-u.ac.jp（石川）



報告 芸術（音楽と美術）教科に関する緊急シンポジウム

日時：2006年1月8日（日）

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター国際会議場

テーマ「感性と心の教育に寄与する芸術（音楽・美術）教科の役割と方法を問い直す」

新年早々の平成18年1月8日（日）、標記タイトルのシンポジウムが、東京の国立オリンピック記念青少年総合センター国際会議場で行われた。主催は、日本学校音楽教育実践学会と美術科教育学会である。（本学会は、事業部が担当した。）

ご存じのように、芸術教科が極めて厳しい状況におかれている。これに対応し、諸学会はもとより、教育団体や関係業者までが、その行く末を案じている。そして、本学会も他の学会・教育団体同様、中央教育審議会や文部科学省等に請願書を提出した。こうした状況下、そのような直接的な訴えかけもよいが、静かながらも具体的な訴えかけの必要性を感じ、計画されたのが本シンポジウムである。

当日は、先ず日本学校音楽教育実践学会代表理事西園芳信氏の挨拶において趣旨説明がなされ、芸術教育分野だけでなく科学の分野からの発言も取り込みたい旨の発言があった。

そして、お茶の水女子大学副学長内田伸子氏による基調講演が、「創造的想像力を育む—すばらしい教師との出会い—」という演題で行われた。専門の発達心理学・認知心理学の視点から、想像と創造との関係、思考と想像との関係が語られ、続いて大江光さんと音楽との係わりに、ピアノの先生が大きく寄与したことなどが話された。この講演を伺い、筆者は「音楽力（芸術力）」と「教育力」の持つ偉大さを感じた。

次に、「感性と心」の教育に視点を置いて、様々な立場からのパネルディスカッションが行われた。パネリストは授業実践の立場から大阪教育大附属平野小講師齊藤百合子氏（音楽）・お茶の水女子大附属小教諭郡司明子氏（美術）、教科教育学の立場から大阪教育大教授小島律子氏（音楽）・群馬大教育学部教授新井哲夫氏（美術）、そして脳科学研究の立場から株式会社日立製作所役員待遇フェロー小泉英明氏、またコーディネーターは、美術科教育学会代表理事橋本泰幸氏と先の西園氏であった。

各立場から、示唆に富む多くの発言がなされ有益であった。ただ、難しいこととはいえ、もう少し両教科のやり取りが欲しかった。そして、近くて遠かった両科の討論はこうした緊急事態の起こる前に行われるべきではなかったかと思う。

しかし、何よりも新鮮であったのは小泉氏の発言である。論旨が明快で、我々素人にもよく分かる内容であった。我々は日ごろ「豊かな情操を養う上で芸術教育が重要」などと言っているが、脳科学の視座からの発言はもっと明白である。すなわち、脳幹・古い皮質・新しい皮質の3層構造からなる能は、いくら新しい皮質に知識が詰め込まれようとも、それを活用する古い皮質が司る意欲や志がなければ何も始まらない。芸術はこの古い皮質と深く係わるとのこと。パッションを生む脳のこの領域をしっかりと鍛えることが芸術教育の本質であると言う。また、フロアからの様々な質問に丁寧に答えてくれた小泉氏は人格的にも優れた方だと感じた。こういう方が、芸術教育の必要性を明確に語ってくれたことは、非常に意義あることであった。最後に、250名を収容する会場に立ち見までが出、フロアからの発言も相次ぐなど盛り上がったこの会に、美術関係の参加者が音楽関係者に比べ、かなり少なかったのは残念である。

（文責・増田金吾）

報告 第10回東地区会+ SoVA プロジェクト第3回理論探究研究会

日時：2005年11月27日（日）
会場：横浜トリエンナーレステーション
テーマ「越境するアート，変容する鑑賞の現在」



表記の研究会が「越境するアート，変容する鑑賞の現在」をテーマとし、平成17年11月27日（日）、横浜トリエンナーレ2005開催会場にほど近い神奈川県横浜市中区の横浜トリエンナーレステーション2F（ZAIM）の講堂にて開催されましたのでご報告申し上げます。主催は当学会とSoVA(Seeds of Visual Art)プロジェクト*）で、横浜トリエンナーレ2005、横浜トリエンナーレ学校の協力を得て開催され、40名程の参加を得ました。研究会は代表理事でSoVAプロジェクト代表の橋本泰幸氏の挨拶のあと、鳴門教育大学の谷口幹也氏より問題提起がなされ、パネラーによる報告と提案へと進みました。パネラーは横浜山手中華学校の王節子氏、横浜美術館アトリエ課の三ッ山一志氏、千葉大学の長田謙一氏のお三方で、後半は参加いただいたフロアーの方を交えての総合討議を行いました。

まず橋本氏から、子どもの生きた学力と美術教育のリアリティをめぐってのお話があり、続いて谷口氏からは、今を生きる私たちの多層性を意識したアイデンティフィケーション(Identification)の獲得を基軸とした鑑賞教育の捉え直しなどについての問題提起が為されました。パネリストからの報告では、まず王氏より「横浜トリエンナーレに子ども達が出会った！～人、もの、こととの出会いから～」と題し、横浜トリエンナーレに子どもたちと共に参加した様子が映像資料などで示されながら、子どもたちがキュレーター体験などを通して変容し成長していく様子などが報告されました。三ッ山氏からは、「子どもの育ちと鑑賞の役割について」と題し、横浜美術館での鑑賞プログラムについてご報告頂くと共に、子どもの育ちや自律といった視点から鑑賞の課題と展望をお話し頂きました。そして長田氏からは、「『参加』の美術／美術による『参加』・序説—コミュニケーションな運動の中で『見ること』へ」と題してご報告頂きました。長田氏は、近代以降の美術と作品成立に関わるお話を出発点にしながら、美術というシステムが私たちの参加を不可欠の要素として来たということを重く見、アートと教育をめぐる問題すなわち、今後私たちがいかに表現を通して自らの声を聞き、他者の声を聞くかという、アート（それは既存の美術の枠組みをも越境する）と教育の問題が交差する地点に、参加型アートの課題があることを指摘されました。そして活動プロセスの中に美術を措定することで生まれる、人間同士あるいはアートと人間の不断の交渉関係と、そのプロセスの中に美術が立ち上がることが生成するダイナミズムへの展望などについて語って頂きました。

後半の総合討議では、多様かつ重要な問題がフロアーとパネラーのあいだを行き交い、最後に当学会東地区会統括理事宮脇理氏よりご挨拶を頂き、盛会に終了致しました。なお当研究会の開催に当たり東地区会担当理事山田一美氏にお力添えを頂きました。関係各位のご協力を得て無事終了致しましたことに感謝申し上げます。

（文責：相田隆司）

*）平成17～19年度科学研究費補助金（基盤研究B）「知の統合力を育成する鑑賞学習支援システムの開発」（研究代表 鳴門教育大学教授 橋本泰幸）

報告 第10回西地区会+美術教育史研究部会

日 時：2006年1月14日(土)
会 場：サクラクレパス大阪本社ビル6階会議場
テーマ「山本鼎と美術教育～山本鼎の再評価をめぐって～」
共 催 サクラアートミュージアム



開会の言葉 西地区代表 花篤 實
発表

- 1, 「日本の美術教育を変えた人 山本鼎展」について
清水 靖子 (サクラアートミュージアム主任学芸員)
 - 2, 「『金の船, 金の星』山本鼎の自由画選評～自由画教育の本質と描画材の変遷～」前澤 朋美 (長野県上田市役所情報課・前山本鼎記念館学芸員)
 - 3, 「山本鼎と自由画運動に関する通念及び山本の重心移動について」
金子 一夫 (茨城大学教授)
 - 4, 「山本鼎と大阪～一本線描法, 教育美術振興会との接点を巡って～」
花篤 實 (大阪教育大学名誉教授)
- フォーラム 山本鼎の再評価, 質疑応答

山本鼎の自由画運動と関係の深いサクラクレパスのミュージアムが、1月14日～2月12日の期間「日本の美術教育を変えた人～子供たちはクレヨンで絵を描き始めた～」と銘打った山本鼎展を開催されるのに併せた形で、今回の地区部会を美術教育史研究部会と共同して、展示会のオープンセレモニーとして開催させて戴いた。地区部会なり研究会の企画が1ヶ月前ぐらいで決まった為、せっかくの企画が十分にPRできなかったが、それでも70名近い人が集まって、会場は満杯に成った。

ミュージアムの清水さんが、まずこの展示会の趣旨や山本鼎とクレパス誕生の経緯などを話された後、上田市の山本鼎美術館の学芸員であった澤さんが当時の児童文学誌「金の船-金の星」に掲載された山本鼎の自由画選評を通した自由画教育の意味と画材の関連について発表された。続いて金子氏が自由画教育の通念に対して、方法論としての展開や図案や構成への重心移行について述べられた後、花篤が鼎と大阪の関係に伴って、彼の意志をついだ石原正徳の戦後の大阪図画や西日本連盟活動の展開の話で会を閉めた。時間が無くなってフォーラムの時間がとれず質疑応答に終始したが、サクラの方から当時の鼎の重役としての持ち株が資料として出されるなど、新たな検証が出たりして、会は最後まで盛り上がった。最後にこの会の為、協力戴いたサクラミュージアム並びに部会を大阪に移して戴いた美術教育史部会の皆様に厚く御礼申し上げます。

(文責：花篤 實)

造形美術教育という考え方

宮坂 元裕 (横浜国立大学)



学校制度は教えることと学習することによって成立している。教えることは指導といたり支援といたりしているが、教師に出来ることは教えることだけである。学習のパターンについてはガニエの8パターンが有名であるが、その後ソーンダイクらのS-R理論全盛時代が来て、刺激—反応—強化以外の学習パターンは影をひそめてしまった。しかし、模倣、試行錯誤、洞察などは見逃せない魅力を持っている。学習にはもうひとつの側面がある。それを型(タイプ)とすると次の4つがある。知識・理解の学習、問題解決の学習、技能の学習、態度の学習である。

戦前の図画教育、手工教育は、知識・理解の学習や技能の学習が中心であった。教えることを中心とした教科であったから教育方法の体系化はやりやすかった。いわゆる教材排列という考え方が存在した。

しかし、戦後の図画工作、美術の教育は、問題解決の学習、態度の学習へと学習のタイプは大きく変換した。学習課題を問題解決的に解決する。そのときに態度の学習も行うことが出来るという考え方である。例えば今回の中央教育審議会芸術専門部会の委員(音楽・美術・書道)の発言の中には、次のような意見が散見される。

- ・ 芸術教育とは「自分を作る教科」である。
- ・ 知識・技能の獲得は目的ではなく、結果である。
- ・ 子どもが活動したり、考えたりしながら知識や技能を身につける授業に変わってきている。
- ・ 図工・美術・芸術の中で自由に表現できる能力を育てていくこと、引き出しを多様に持たせることが大切である。

(文部科学省ホームページ 平成17年9月28日資料7より抜粋)

以上のことを単純化して教える教育から育てる教育の転換として考えてみよう。現在の図画工作と美術の中身を考えてみるに、小学校の育てる教育から、いきなり中学校の教える教育となり、水と油のごとく分離している。特に、小学校と中学校の学習指導要領の不連続性には、みな頭を悩ませている。今回の学習指導要領の改訂では、ぜひ改善してもらいたいものである。私は、この二重構造化について、その原因を二つほど考えている。言い古されたことではあるが敢えてのべてみよう。

歴史をさかのぼれば、既にギリシア時代には美の基準があった。神が絶対であるように、絶対的な美の基準があり、「美」を自然の模倣であり再現であるとみて、人間はそれを学んだ。また、洋の東西を問わず人間ではない人間が存在した。(それは奴隷であったり、身分制度であったりした。)ところが18世紀後半、産業革命、フランス革命が、ほぼ同時に勃発し、その結果、人間は自由であり、平等であり、それを支えるものは博愛であるという考え方が生まれた。

「美」の問題も、美は人間の主観的空想であり、自分が美を感じればよいという考え方が生まれた。フランス革命から百年ほどたってマルセル・デュシャンが生まれ、そのことは決定的

となった。以前、フィラデルフィアの美術館で、デュシャンの作品群を見て、既成概念の打ち砕き方に感銘を受けたことを思い出す。

横浜トリエンナーレは昨年12月18日に閉会した。テーマはアート・サーカス(日常からの跳躍)であった。作品と静かに対峙して作品を鑑賞する、というコンセプトではなかった。入場者の積極的な参加を促し、刻々変化していくことをコンセプトとしていた。サーカスを見に行くのではなく、サーカスを行うという感覚である。それを理解すると、結構楽しいイベントであった。私が象徴的と感じたものは、入り口正面に、高松次郎の大きな絵があったことである。1971年1月7日、一日だけ銀座の工事現場に展示された、あんな大きな作品を良く取っておいたと思って近づくと、それは、集団で描かれたレプリカであった。オリジナルとコピーを超越している、まさに「美術である」から「美術がある」を主張しているようで面白かった。

同時に横浜美術館ではリ・ウーフアンの大きな展覧会があった。作家本人のレクチュアがあり、その後の質疑応答の中で、学生の質問に対し「私は美など考えたことがない」といったのには驚いた。

以上二つのエピソードから、現代美術の世界では、「自分にとっての美というものの存在の追及」という方向性が読み取れる。

私は若いとき、16年間小学校教員をしていた。その間2回6年間小学校1年生から3年生までの学級担任をした。この年代の感覚は、まさに自己中心的な意味での「美は私の中にあり」の感覚である。そして柔軟性を持っている。例えば、まん丸を描こうというと、大人はコンパスを思いつき、コンパスがないと描けないと考える。しかし、小学校1年生は、どこからか皿を探してきて、それを伏せてなぞって、いとも簡単にまん丸を描いてしまう。「好き」「気持ちいい」「きれい」「おいしい」全て自分の感覚の中で決める。このような年代に、大人の美の基準を教え込もうとしても、あまり意味を持たない。人間には未来を予測し、現在を作り変えていく力があり、小学校1年生にも、その力はある。このことを問題解決的に、態度の育成を学習することを、私は造形教育といたい。以上、わたしが考えるアイデアリズム(フランス革命の時代、ヘーゲルに端を発した考え方)と古代から続くリアリズムの二重構造である。そして、小学校中学年までは造形教育を行い、その後、子どもの中に自我が目覚め、客観的に自分を見つめなおそうという意志が定着したのを確認してから、リアリズムの教育、すなわち美術の技能や知識・理解の学習を行い、このことを美術教育といえよ。この文の最初のほうで述べた「造形美術教育」はそのような全体の意味を含んでいる。

平成18年2月13日中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会審議経過報告が出された。26ページ「豊かな人間性と感性の教育」の中に「音楽、図画工作、美術などにおいては、感性を高め、思考・判断し、表現するという一連のプロセスを働かせる力、主題を発想し、構想を立て、創意工夫をしながら創作活動を行ったり、作品を評価したりする力が重要である。(5行おいて)鑑賞は創造行為であり、自分なりの意味、新しい美、自分を発見するなどを大切にすることがある。—と記されており、ほぼ上記した、私の考え方の整合性を確保しており、安心している。関係者諸氏のご努力に感謝する。なお43ページ、「中学校における選択教科」の中に「選択幅を広げることに消極的である」の文言があることを付記しておく。

す。大正デモクラシーという、このような時代背景のもとに教育界では自由教育の気運が高まり、子どもの個性や自発性を尊重する新たな教育思想を取り入れた学校が次々と誕生します。その中でも私は特に文化学院に着目し、それを研究対象として、戦前において学校の運営に携わった文化人や芸術家の教育思想と実践を明らかにしていきました。

大正10年に創設された文化学院は自由主義に基づいた学校であり、創始者・西村伊作のもとには歌人の与謝野寛・晶子、画家の石井柏亭、作曲家の山田耕筰など、当時の代表的な芸術家や文化人が教師として招かれ、日本の学校の中で先駆けて本格的な芸術教育を展開しました。文化学院の全体運営にも携わりながら美術の授業を担当し、学校の美術教育を支えたのは石井柏亭です。彼は本職の画業だけではなく、山本鼎が唱えた自由画教育が図画教育界を席卷しつつあった時代に、それと一線を画した美術教育を行いました。石井柏亭は後に、戦前文部省から発行された図画教科書『小学図画』や『エノホン』の編纂にも携わるなど、美術教育の歴史において重要な役割を担っています。しかし、これまで彼の美術教育については具体的に触れられることはありませんでした。そこで私は、石井柏亭の美術教育者としての側面に焦点を当て、彼の美術教育を掘り起こしていくことにしました。

石井柏亭(本名・満吉)は、76年の生涯において、画業だけでなく芸術・美術に関する執筆活動をも精力的に行い、評論や多数の著作物を残した画家です。さらに、教育や文学など実に幅広い分野で活躍しました。明治35年、20歳の石井柏亭は、当時の斬新的な詩歌雑誌『明星』に挿絵を描き、このときの仕事がきっかけとなり、与謝野寛・晶子との付き合いがはじまります。また、北原白秋の出世作となった処女詩集『邪宗門』(明治42年刊)では、装幀と装画を手掛け、北原白秋の詩を飾りました。この詩集は「パンの会」の活動を通して結ばれた若き詩人と画家の芸術観の結晶といえるものでしたが、こうした詩人と画家の交流が生まれたのも互いの分野に精通する石井柏亭の存在が大きかったと考えられます。

石井柏亭はヨーロッパ諸国を廻り、日本各地やアジア諸国を旅して画業に励むなど、作品を発表し、画家としての地位を築いていきます。そんな彼が美術教育に関心を持つようになったのも、山本鼎の活動に刺激を受け、さらに実弟石井鶴三が山本と一緒に自由画教育運動を推進していたことが影響していたと推察します。大正9年秋、石井柏亭は与謝野晶子の推薦を受け、西村伊作から学校設立の協力依頼を受けます。与謝野晶子は西村伊作の芸術を取り入れた自由主義的な教育の理念、特に女子教育の改善を図ろうとする彼の信念に共鳴し、まさに自己の理想とする教育のあり方を託します。石井柏亭もまた自由画教育とは異なる新しい美術教育のあり方を模索し、それを目指す上で西村伊作の教育方針にかけていたといえます。

大正10年の文化学院創設から昭和17年に退職するまでのおよそ20年間、石井柏亭は文化学院の美術教師を務めました。言うまでもなく、臨画主義の図画の教育から美術教育への転換を促したのは山本鼎の自由画教育であり、石井柏亭が残した美術教育の足跡は、山本鼎のそれと比べると目立たないものです。しかし、石井柏亭は地味でありながらも堅実に美術教育の実践を通して、独自の美術教育論を確立したといえます。

現在、石井柏亭の美術教育研究については継続して進めておりますが、私はこうした教育史研究とは決して過去のことを掘り起こすだけの作業ではないと捉えています。歴史を紐解き、教育が歩んできた道や実践家たちが為し得たことをより理解し、これからの教育を考えるための手掛かりにしていくことが大切であると考えています。そこに教育史研究の意義と魅力があるのではないのでしょうか。

文献解題

学術文献の紹介と解説

ハーバート・リード著，勝見 勝，前田泰次訳

『インダストリアル・デザイン』 みすず書房，1957

(原著名 Art and Industry : the principles of industrial design)

福井一真 (兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程)

現在，店頭で販売されている商品のほとんどが大量生産による工業製品である。言うまでもなくその多くは機械によって生産され，同じ機能を備えたものでも色や形は多種多様なものになっている。今日ではこのような大量生産や商品の形状に工夫を凝らすということは，当然のこととして消費者に受け止められており，企業にとっては自身の存続をかけた必要不可欠な要素となっている。

産業革命以降，機械と芸術の間では衝突が繰り返されてきた。1851年にはロンドンで万国博覧会が催されたが，以後機械と芸術の対立は熾烈を極めて行くことになる。そうした中，19世紀後半にイギリスでアーツ・アンド・クラフツ運動が沸き起こった。その後機械による工業が発達していくと，アール・ヌーヴォーやドイツ工作連盟といったようなデザイン運動が活発になり，バウハウスなどによって提唱された機能主義のデザイン思潮は国際的なムーブメントとして発展していった。

1934年，英国の評論家であるハーバート・リードは，このようなデザインの運動やさらに工業の機械化が進む中で，『Art and industry』を出版した。日本では『インダストリアル・デザイン』と訳されて出版されているが，多くの研究者が指摘している通り，今日のマーケティングを軸とする「工業デザイン」とは違った意味合いを含んでいる。本書の中でリードは工業製品のあり方や産業時代の教育のあり方を芸術という視点から捉え，独自の意見を述べている。現代からみても，これは70年も前に出版された古典的なものとして我々の眼に映るかもしれない。しかし，当時のリードは現代美術研究所(ICA)の中心的な存在であり，著書『Art and industry』はモダン・デザインのバイブルとして多くのデザイナーの支持を受け，リードの提唱するモダンアートが一つの権威として確立するほどに反響を呼んでいた。

『Art and industry』は四部構成で成っている。第一部では「問題の歴史的側面と理論的側面」という表題のもと，機械で作られるものに美術として欠く事のできない資格をもつことができるかということの問題として取り上げている。産業革命によって手工業は生産過程から締め出されていき，工場制機械工業へと転換していく。この当時，すでに商業的ファクターのひとつとして美術は注目されていた。しかし，リードは「美術」と「応用美術」，「人文主義的美術」と「抽象的美術」との区別もせずに，機械製品に美術を応用していくことに対して問題を投げかけている。また，形態(form)の概念やオーナメント(装飾)の機能についても考察し，《機械は美術品を生みださうか》ということの問題の核心としてあげた。そして，美術の一般的な性質として《人文主義的美術》と《抽象的美術》との二つの型を列挙し，機械美術における形態的価値についても言及している。一部の最後には，問題の解決にあたりドイツのヴァルター・グロピウスの指導のもとに行われた「バウハウス」の実験的な運動を例に挙げ，実践活動のあらゆる領域で，材料に状態をあたえるために美術家すなわち《抽象的美術家》が必要であると主張している。

第二部では「形態」と表題し，一部でみてきた形態についての理論的なアプローチとは異なる

り、具体的な材料や目的について考察している。材料にはプラスチックなどの総合的（合成的）なものもあるが、ここでは主に無機材料と有機材料の二つに分類した。無機材料は陶磁器、ガラス器、金属器の三部門からなり、有機材料は木工品、織物、皮革製品の三部門である。そして、各々の材料について加工法や機能性、特色などを詳細に網羅している。また、目的や機能という言葉についても言及し、「機能」という言葉は、物がその目的を果たすときの働き方を意味していると述べ、最後には「機械時代における美術の仕事は、構成である」と結んでいる。

第三部では「色とオーナメント」と題して、空間知覚の心理学の視点から眼の働きについて述べ、第一部でも少しふれたオーナメントについての起源や、種類、形態との関係、機械によるオーナメントなど、より詳細に考察を深めている。

第四部では「産業時代の美術教育」と題して、《消費者の審美眼の教育》と《生産者の美的デザイン感覚の教育》を中心的な課題として取り扱っている。リードは《美的教育とは、感覚の教育以外の何物でもない》と述べ、教育というものは徹頭徹尾、全人教育でなければならないという見解を示している。そして、美術教育の形式は「職業学校」にするべきで、これのないところでは学校を工場と同じものにするべきであり、ここでもドイツの「バウハウス」が試みたような学校を工場にかえること、工場と全く同じ生産能力を備えた学校、小型の工場組織をつくることであると主張している。

先にも述べたが、バウハウスを一つのモデルとして、もの自体の良いデザインを追求していくというようなリードのモダニズムの思想は、半世紀も前のものであり、当時に比べて産業のスタイルもデザインのスタイルも大きく変容を遂げた現代に、そのまま置き換えることは難しい。1960年代には高度経済成長によって産業界は大きく変化していき、FRP（強化プラスチック）などの新素材の出現や、エレクトロニクスの発達など、その変化は産業界にとどまらず、デザインの世界や美術、工芸の世界にまで変化をもたらした。20世紀の終わりにさしかかる頃にはデザインは終末を迎えた、などという声もきこえるようになった。

しかし、ここで現代に生きる我々が、もの自体に焦点をあて、素材を捉え直し、人間本来の装飾のあり方を追求してきたリードの思想を、過去の遺物として葬り去っていいものであろうか。現代は進んだ工業技術から生みだされる製品が大量に氾濫し、それと比例するかのように大量にものを消費していく消費社会であるといえる。通信技術の発達により、消費者に、より簡単に、より多くの商品を届けることができるようになった。消費者は次々と新しい商品を手にし、必要ではなくなったものは処分していくという、使い捨てる社会であるといっても過言ではない。このような社会のなかで、商品といった「もの」自体に眼を向けている消費者はどれくらいいるのであろうか。原研哉は『RE DESIGN 日常の21世紀』の中で日常のあらゆる物品をとりあげ、様々な分野で活躍している人々に Re design, デザインのやり直しをしてもらうという試みを行っている。これまでのデザイン、特に20世紀後半の50年は経済と密着しすぎていたためデザインが社会に浸透していなかった。21世紀はデザインが社会の中に産み落とされる世紀であると主張している。また、今を生きる子どもたちにとってもこのような消費社会は良い環境であるとはいえない。当たり前のようにものが素通りしていくような社会では、もの自体の尊厳が矮小になっていくのではないだろうか。こういう時代であるからこそ、リードの思想を過去のものであると捉えるのではなく、新たな視点で捉え直していくことが、今後のデザインの世界や子どもたちのデザイン教育にとって重要になってくるのではないだろうか。

請 願 書

教育課程における美術教育の発展に向けて

平成 17 年 11 月 24 日

文部科学省初等中等教育局長
銭谷眞美 殿

美術科教育学会 代表理事
橋本泰幸

今般、次代の学校教育の基本となる教育課程について、中央教育審議会が中間報告の提出を準備中であると承りました。つきましては、この機会に、小・中学校美術教育の充実と発展について初等中等教育局長のお立場から、大所高所からのご配慮をしていただきたく、書面をもってお願いする次第です。

学校教育における美術教育は明治当初から始まる長い歴史を持ち、近代日本社会の感性的および造形的基盤を形成していると言えます。さらに、近年の大きな社会的変動の中で、その意義と役割を新たなものにするべく教育現場と研究者が連携し、21世紀における創造的感性や伝統的美術文化受容に関する基礎基本とは何かを研究し、その成果を子どもたちの学習の場にもたらしております。

私たち美術科教育学会（学術会議所属）には会員500余名が所属し、全国ほとんどの教員養成系大学・学部の美術教育担当者、そして小学校・中学校・高等学校の図画工作・美術科教師が参加しております。30年近い学会活動の中で、多様な造形芸術を媒体とする教育の可能性を探究し、図画工作・美術科教育の実りある学習のあり方について、その理念、方法、内容などの観点から研究・実践してまいりました。

今般の学習指導要領の見直しにあたっての検討課題には「〈人間力〉向上のための教育内容の改善充実」が筆頭に挙げられ、そのための具体的課題として「社会の形成者としての資質の育成」や「豊かな人間性と感性の育成」などが示されておりますが、私たちはこれに深く同意するものです。

図画工作・美術科教育は、戦後一貫して、人間の根源的な能力の育成を目指してきたものであり、特に、近年は、美的表現をコミュニケーション能力の育成として捉えること、社会との絆を全人格的に形成することなどを大きな課題としてきました。美的表現は単なる自己表現ではなく、地域社会や国際社会との歴史的・空間的な繋がりの中で形成されるコミュニケーション活動であり、同時に自らの内面との対話でもあるというのが美術教育の立場です。

このような芸術表現のダイナミズムを教育の中に組織化し、子どもの主体的な学びを生み育てることは、今日の教育課題に応える確実な道筋でしょう。わが国の教育にとって急務と見なされている「異文化理解教育」においても、多様で柔軟な文化理解は、感性に裏付けされた知性による対話が可能にするのであり、多様性を重視する美術教育の中で鍛えられた個人が担い手になると考えられます。

私たちの美術科教育学会では発足以来、美術教育の学的確立とその深化を追究してきました。

その中で明らかになってきたことのひとつは、多様なディシプリンが多様な学びを生む、ということ。図画工作・美術の授業の中で、子どもたちが自由に、そして主体的に学び活動することは、次代の国民に求められている異文化理解の能力を養い、文化に寄与する創造的個性を培う最も有効な教育であると考えられます。

上に述べさせていただいた認識に立ちますと、美術教育の充実こそが我が国の教育にとって急務であり、図画工作および美術について、更なる時間数の削減を行うことは、将来的に大きな損失を国民にもたらすのではないかと深く危惧するものです。ご承知のように、欧米諸国においても、またアジアの諸国においても、この教科は映像メディア関連の産業創出の基盤として着目されています。そして、いっそう普遍的な人間形成という教育理念に照らしても、バランスのとれた多面的な発達を促すという美術教育の特質を根拠に、活力があり安定した社会を維持・発展させる上で、きわめて重要な教科として広く認識されていると言えます。

また、美術教育と音楽教育は、互いに替えがたい特質を持っております。絵画制作やデザインをする機会が無くなり、自己や社会との対話を経験しない子どもたち、合唱の機会が奪われて、その喜びを知らない子どもたちが生まれることは、日本社会にとって非常に大きな損失になるにちがいありません。

美術と音楽は美的表現として共通する側面はあるものの、芸術表現の形式も学びの姿も、またその教育で培われ陶冶される感性も大きく質を異にするものです。すなわち、安易な「総合」概念のもとに両者が統合されると考えるのは、あまりに早計でしょう。

近年の美術教育は、絵画や彫刻といった表現の学習だけでなく、鑑賞教育が重要な領域として認識されております。その潮流の中で、多様な伝統の受容や文化認識が表現活動と結びつけられ、感性と知性の二者が相俟って新たな美術の学びを生みだしていることは大きな特徴と言えるでしょう。また、デザイン分野では生活・社会・環境のあり方を考え、さらに映像メディアやCGなど、コンピュータによる表現活動も情報化時代の美的教育として探求されつつあります。いま、美術教育は「人間」「社会」「環境」という三者について学び、それらを結びつける基礎的な知として認識され、現代社会にとって必要不可欠な学であることが多くの識者から認められています。

以上の点についてご理解を賜り、よろしくご勘案の上、学校教育における美術教育の一層の充実と発展をお図り下さいますように、ここに請願するものです。

上記掲載の誓願先請願書のほかに、下記の宛先に請願者：美術科教育学会代表理事 橋本泰幸の名により、「題目」と本文細部が異なるものの、同様の趣旨の請願書を同時期に郵送しておりますこと、ここに報告致します。

美術科教育学会代表理事 橋本泰幸

中央教育審議会会長 鳥居泰彦氏

請願書題目「教育課程における美術教育の充実に向けて」

中央教育審議会教育課程部会部会長 木村 孟氏

請願書題目「教育課程における美術教育の充実に向けて」(同上)

事務局より

◆学会費の納入状況のお知らせ方法の変更について

これまで会費納入状況については、個別に文書にてお知らせしておりましたが、先号送付時より事務局からの郵送物の宛名ラベル右下に明示させて頂くことに致しました。(今号より“未納額”及び“¥”の標記は省略しております)

平成17年度までの会費が全て納入されている方は“0”になっています。(右図参照)

会員の皆様には年度当初の会費納入をお願いしておりますが、平成16年土以前の含めて、会費未納の方々もいらっしゃいます。各自の納入状況表示をお確かめ頂き、まだお振り込み頂いていない方につきましては、早急にお振り込み頂きますようお願い致します。

なお、平成17年度当初に事務局より配布しました学会費振込用紙に平成17年度分という印刷されていたため、16年度以前で未納がある方で17年度会費のみをご入金して頂いている場合がございます。不明な点がございましたら、下記宛メールにてお問い合わせください。

〒772-8502 徳島県 鳴門市鳴門町高島字中島748番地	
美術 太郎 様	
4xxxx	8000
会員番号	学会費未納額

学会年会費 郵便振込先

口座記号番号： 01610-9-111229

加入者名： 美術科教育学会

★なお、自宅や勤務先に変更がある場合には、備考欄に、変更後の名称や住所を明記して入金してください。また、その際に、電話番号もお忘れなくお書きください。

◆新入会員の紹介 1月31日現在で手続きが完了している方

鮑 双陽(広島大学教育学研究科学生), 高井 幸人(トキワ松学園中学高等学校), 古草 敦史(神戸山手短期大学), 笹本 博紀(千葉市立磯部第三小学校), 山崎 明子(港区立男女平等参画センター), 菅野 宣衛(湯沢市立高松小学校), 太田 美香(愛知教育大学大学院生), 持田 美保(出雲市立旭丘中学校), 池田 真規子(神戸市立小磯記念美術館), 京都造形芸術大学 芸術文化情報センター(購読会員), 愛野 良治(嬉野町立塩田小学校), 清水 雄大(京都教育大学附属京都中学校), 松村 一樹(京都市立高野中学校)

訂正とお詫び

「美術科教育学会通信」No.58(前号)の井上由佳氏ご執筆の文献解題において誤植がありましたので、次のとおり、つつしんで訂正させていただきます。

9頁文末から3行遡る箇所

(誤) 日本の美術教育研究最前線

(正) 日本の美術教育研究の最前線